


# 「最期は…」、救急医を変えた父の死 コロナ禍、一目会えず罪悪感 「見ない方が」から「触れたい」へ

有料記事

2023年1月26日 16時30分



父を亡くした救急医の男性。父の似顔絵は、母が描き、父が額縁を作った＝京都府内 

厚生労働省は本月、新型コロナウイルスに感染して亡くなった人の遺体からの感染リスクは極めて低いとして、コロナ禍で続けてきた制限を緩和した。適切な処置をすれば遺体を納体袋で包まず、通常の葬儀ができるようになった。この制限緩和の直前、感染した父と思うような最期の別れができず、複雑な思いを抱える一人の医師がいる。

火葬場に駆けつけると、棺(ひつぎ)は白い粘着テープで目張りがされていた。中には、密閉された「納体袋」におさめられた父がいるという。

顔を見るための棺の小窓も閉じられ、一目会うことさえ許されない。やむを得ず、棺の外から手を合わせた。先月中旬のことだ。

約1時間後、骨になった父と再会した。「これが本当におやじなのか」。実感が全くわかなかった。みとってあげられなかった、何もできなかったという罪悪感だけが募った。

生前、新型コロナウイルス陽性と診断された父を亡くしたのは、京都府の60代の男性救急医。これまで数え切れないほどの人の死と向き合ってきた。

「おつらかったでしょうけど、いい顔をしておられますね」「苦しまずに亡くなりました」

病院の救命救急センターでは遺族ができる限りつらい思いをしないよう、故人と対面する瞬間は言葉を選び、声をかけてきた。

一方で、国内外の災害医療に長年携わった経験から、「遺族は最期に会わないほうがいい」と思える遺体も数多く見てきた。

2004年のインドネシア・スマトラ島沖地震では、津波で腐敗した遺体を目の当たりにした。08年の中国・四川大地震では、柱に挟まれて亡くなったとみられる子どもたちを掘り起こした。

遺族たちは亡くなった家族を必死に捜していた。だが現場は凄惨(せいさん)で、「故人を見たら、遺族がもっと傷つくんじゃないか」とさえ思っていた。

自らの父の死を経て、考えが変わった。「故人の最期の姿にどうしても会いたい、触れたいという気持ちが初めてわかった」

父が大好きだったサケフレークをスーパーで見かけると、いまでも涙が出る。「父と最期に会えなかったことが、こんなにつらいとは思わなかった」

父の死からしばらくして、厚労省が新型コロナで亡くなった人の葬儀などに関して、ガイドラインを改定する方針だと報道で知った。

改定後は、遺体に詰め物をして体液が漏れないようにすれば納体袋は不要▽葬儀や火葬、拾骨(骨くこつ)揚げ)は基本的に実施する▽遺族が無症状の濃厚接触者でも、検査で陰性なら葬儀や火葬に参列できる、などとした。

新型コロナで亡くなった人は、6万人を超える。「なぜもっと早く、遺族の気持ちに寄り添って指針を改定できなかったのか」という怒りがこみ上げてきた。同時に、「故人に会えないつらさを遺族に強いてきたのは、私たち医療者側ではないのか」という思いも巡った。申し訳なく、悲しい気持ちになった。

「これまで通り、遺族が故人と最期の時間をともに過ごせるようになってほしい」。父の四十九日を控えた今、願っている。

葬儀業関係者からも、今回の改定を肯定的に受け止める声があがる。

#### ■制限は緩和、「意向に沿いやすく」

「ご遺族のご要望が通りやすくなるのではないか」。業界大手のベルコ(本部・大阪府 池田市)の広報担当者はいう。例えば、火葬後に遺骨を骨壺(こつつぼ)におさめる骨揚げ。遺族が立ち会いを希望しても、火葬場に感染対策を理由に断られ、実現できないこともあった。「ガイドラインに従いつつ、思いに寄り添いたい」

別の葬儀業関係者も、「今後は直接ご遺体に触ってお別れしたいというような、ご遺族の意向に沿いやすくなると思う」と話す。(島脇健史)

---

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.